

六朝以来諸文献所引「洞神經」に就いて —②卷次未詳「洞神經」—

山 田 俊

前稿に引き続き、本論では卷次が明示されていない「洞神經」の検討を行う。原則として撰述時期の早い文献が引用する資料から検討していく。以下の論述で用いる「? -1」等の番号は、巻末資料の番号に対応している。尚、紙幅の関係により検討は主たる資料に限られることを御容赦願いたい¹。

(一)、卷次未詳「洞神經」

・ ? -1

? -1は各種体内神を紹介し、その「一萬八千」の体内神の存思が達成されたならば、更に天から「一萬八千」の神が降臨し、両者が一体となることで昇仙し「神仙」となり、無限に変化し得ることを述べている。

・ ? -2

? -2は「三皇文（經）」の内容を多く留めるものと考えられ、大淵忍爾氏が既に検討されているが²、若干の補足を試みたい。冒頭の「天皇文曰～」の箇所は、やや後段の「黄帝曰、地皇文者、…黄帝曰、人皇文者…」という表現を勘案すれば、本来は「黄帝曰、天皇文者…」であり、「黄帝」の口によって「天皇文、地皇文、人皇文」が紹介されていたと推測され、「三皇文」に関する解説と考えるべきものであろう。従って、「三皇文」と密接に関わる内容ではあるものの、「大有籙圖經目」が載せる「第一～三卷」に相当するとは断言できない³。

? -2に就いては、以下の点が問題点として残る。

- ①、「天皇文第一法」は192字、「地皇文第二法」は164字、「人皇第三法」は110字であり、これらは、現存「三皇文」と目される『上清靈寶濟度大成金書』卷32（『藏外道書』17冊）所収「天皇文」297字、「地皇文」241字、「人皇文」154字、『道門定制』卷4所収「天皇文」314字、「地皇文」233字、「人皇文」158字、『靈寶領教濟度金書』卷262所収「天皇文」279字、「地皇文」240字、「人皇文」152字の何れとも合わない。又、六朝の撰述とされる『太上求仙定錄尺素眞譯文』所収通行文字本の内容は? -2と一致しない⁴。
- ②、「金光自來内音符」の箇所に「出天皇第六・十五字」と有るのは、「金光

自來内音符」が「天皇第六」の「十五字」中に見られるという意味と考えられるが、上段の「天皇文第一法」を見れば、その第六は「一十字」しかなく、「十五字」はない。以下の記述にもこうした矛盾が見られることに就いては、大淵氏が既に指摘されている⁵。

？-2の内容は、「必爲人除之（＝死籍）、然後修道求術、必得神仙矣」と述べている様に、「神圖文字」の威力に依り諸神によって「死籍」が取り除かれることが修道の前提として言われ、「三皇内書」以下の諸符が修術にとって不可欠なものとしてされている。即ち、「字」「符」の威力を絶対的なものとする立場である。

尚、問題点①で示した近世諸文献が伝えるものが「三皇文」であるという見解が有るが⁶、これら「三皇文」が果たして六朝期の「三皇文」の真面目を伝えているかどうかは極めて疑問である。

・？-3

？-3は、「大洞・洞玄・洞神」の「三洞」に言及し、「大洞」は地上世界には伝授されず、「洞玄」は時折「至學之士」に伝授され、「洞神」は地上世界に下され、国・民を助けることを本来の目的とすると述べる。即ち、「三洞」の整理を背景に持った上で、「洞神三皇」の性質を、当初より地上世界に下されるべき經典として位置付けるものである。

・？-4

？-4には「三界戒」「五戒」「八戒」等の戒律が見られるが、これ等は「洞神經」の該当箇所を適宜繋ぎ合わせたものと考えられる。その内容は『三洞衆戒文』が引く「靈寶初盟閉塞六情戒文」以下（下/1a/3）の文章とほぼ一致する（以下「所引文」と略す）。紙幅の関係で両文献の対照は省略せざるを得ないが、①～③の番号を付した下線部分が一致している。特に注意すべきは、「所引文」の「八戒文」冒頭に見られる「太上曰～」の文が、？-4の③と完全に一致している点である。このことから、「所引文」の各戒の前で述べられている導入文も同様に「洞神經」からの引用と推測される。但し、「所引文」の「三戒文」の前文である「經曰」の内容は「洞神經」に一致するものを見出すことは出来ない。又、「所引文」の「五戒文」の「經云」の内容は「黄帝」と「帝昊英」の間答となっている。これと一致する「洞神經」佚文は確認されていないが、？-4の「三戒」に見られる「帝栗陸氏」と同様に、「昊英」は「三皇」以後に天下を有したと見做されている人物である（『史記索隱』卷30等）。「所引文」の「三訣文」は？-4には見られないが、唐『妙門由起并序』（27b/1）所引「洞神經」とほぼ一致することから、やはり「洞

神經」と考えられる。又、「所引文」の「八敗文」の一部は唐『三洞珠囊』等が引く「洞神經第十二」と一致する⁷。従って、戒律に関する記述が「洞神經」の同一巻次に集中していたと仮定するならば、これらの文は全て「洞神經第十二」である可能性が考えられよう。但し、「所引文」の「七百二十門要戒律文」は「洞神經第七」の文と一致し⁸、「所引文」の「三要文」の一部は？-2「洞神經」とも一致している。こうした状況からすれば、「所引文」のかなりの部分が「洞神經」から構成されていると考えられる。但し、「所引文」冒頭の「六戒」のみは『太上洞真智慧上品大誡』所載「智慧閉塞六情上品戒」をオリジナルとするものである。

これらの諸戒律の内、「五戒」は仏教の「五根悪障」説の影響を受けていると指摘されており⁹、「三戒」は「因縁」を知ることから始まる修道に於ける心構えであり、「五戒」は「目・耳・鼻・口・身」を律することを言い、「八戒」の内容はかなり独特なものだが、儒教の倫理が導入されていると指摘されているものである¹⁰。「八戒」の後文は、戒に関する総論の様な内容となっているが、「太无太空」を戒律の根本としている。「太无」「太空」の両者が連用される例は多くないが、空無を戒律の根本とする立場は、例えば、唐の『太玄真一本際經』巻二「付囑品」が、具体的戒である「有得戒」の他に、空の思想に裏打ちされた「無得戒」に言及している(14b/8)。『本際經』程の整理は見られないものの、「洞神經」の「太无太空」の戒は、その前身とすることが出来るであろう。

・ ? -5

? -5は隋『玄門大義』に基づく『道教義樞』の引用である。『莊子』「心齋」(「人間世第四」)、「坐忘」(「大宗師第六」)の二條に基づく。巻次が明確な「洞神經」では、「第十二」が齋に就いて論じていたが、心との関わりという点から見れば、「第七」が心を重視していたのと同関わりが有るとも考えられる。

・ ? -6 ~ ? -11

? -6 ~ ? -11は何れも『黄庭内景經』の梁丘子注に見られるものである¹¹。? -6は「天・地・人」の間の「九星・九宮・九竅」、「九天・九地・九生」の対応を述べたものである。? -7と同内容を隋の『五行大義』は「道家三皇經」として引用している。時間的にさ程隔たらない両者の事例から判断すれば、「三皇經」と「洞神經」とが互称として認識されていたと考えられる。又、? -7と類似する「六府」の理解がより早期の道典である『太上靈寶五符序』(上/20b/10)に見られることから、ある程度一般的な観念として流通していたもの

を「洞神經」が取り込んだと考えるべきであろう。? -8は「面」を「尺宅」とし、? -9は「腦」を「泥丸宮」とし、? -10は「頭」を「三台君」とし¹²、? -11は下丹田である「臍」を「太一君」とし、何れも体内神に関する理解を見せるものである。

以上の? -7～? -11は何れも梁丘子注が引く体内神に関する記述である。体内神に関するより全体的記述からの部分的引用と考えられ、従って、梁丘子が「洞神經」の同一巻次から引用した可能性が高い。そして、既に確認した様に、体内神に就いては? -1でも言及されており、これらは相互に関連の有る記述とすべきであろう。

・ ? -12

? -12は人に善行を勧める「天老百善」に就いて述べたものである。「天老」に就いては朱越利氏の詳細な検討があり、現在確認し得る道教文献としては、『赤松子章曆』、『太上七星神咒經』、『天老神光經』等にその名が見られるとされる¹³。注目すべきは、これらの諸文献の撰述時期の多くが唐以降と推定されている点である¹⁴。この点は、「天老」の語を含む「洞神經」を引用する『要修科儀戒律鈔』、『至言總』が何れも唐代の成立と見做されている点と一致し、従って、? -12の「洞神經」の受容はさ程古いものではないと考えられる。

・ ? -13～? -18

? -13は「元化人」が遥かな時に於いて、休息と活動を繰り返すことを述べたもので、その根底には「道」の体用論的理解が有ると思われる。? -14は「道」は有形無形に融通無碍に変化するものであることを述べ、? -15は「神人、真人、仙人、道人、聖人、賢人」の全てが「道」の一部分であることを述べている。? -16は冒頭の「大道妙有、能有能無」のみが「洞神經」の引用文とも考えられるが、「大道」は有無のどちらにも融通無碍であることを論じ、? -17もやはり「妙象無形、應感有體」と、感応の思想を軸に有無のどちらにも融通無碍であることを述べている。? -18は、「明智聖師」との感応に就いて述べたものであり、感応することで、「聖」となり得ることが言われている。

? -13～? -18の唐代の文献が引く「洞神經」を見るならば、「三皇文」の性格として常套的に言われて来た、符による「神鬼」の駆使といった内容とは異なり、六朝から唐にかけて好まれた体用論思想や、或いは「大道」との感応と言った思想が述べられていることが分かる。唐の諸文献は「洞神經」のこうした内容に注目していたことが分かる。

・ ? -19

? -19 は、「務猷收」を最高神とする体内神の冠、形態等に就いて述べたものである。周知の通り「務猷收」は『大洞眞經』等の上清派經典に於いて特に重視されて来た体内神であり、これと類似する記述は「洞神經第六」にも見られた。「務猷收」は現行『洞神八帝妙精經』に見られるが(4a/8)、? -19 と一致する記述は無い。

・ ? -20

? -20 は「三十二天」に就いて述べたものである。何処までが「洞神經」の引用文であるのか確定出来ない。従来指摘されて来た様な『度人經』を代表とする天界説の要素が「洞神經」にも取り込まれていることが分かる。

・ ? -21 ～ ? -25

? -21 は「三代三皇」に就いて述べたものである。「三代三皇」に就いては、時代が下る資料ではあるが、? -22、? -23 も「洞神經」から引用している。? -24 は、「洞神部」に「天皇氏、地皇氏、人皇氏」という「中三皇」に関する記述が見られるとし、同時に、「洞神」には「初三皇」「中三皇」に加えて、「伏羲・女媧・神農」の「後三皇」の記述も見られるとするものである。? -25 は「後三皇」の「神農」の別名である「伊軌」に関する記述である。

これらより、「洞神經」には「三代三皇」、即ち「九皇」、及び関連する諸神に就いての記述が有ったことが分かる。「三代三皇」は恐らくは「三皇文(經)」の内容を継承しているものと考えられるが、「洞神經」としては、単に「九皇」の事例を列挙しているだけではない。? -21 を見るならば、「九皇」を「大道の妙用」と「道」の展開として理解しており、「九皇」の羅列に留まらず、「道」を軸とした再解釈が行われていると言えよう。

・ ? -26

? -26 は「洞神經」とは題されていないが、明・孫穀『古微書』が「洞神經」として引くものと一致することから、「洞神經」と同文を含んでいると考えられる。『太上老君中經』の撰述時期は後漢説から唐代説まで見解に幅が有るが、それを収める『雲笈七籤』よりは確実に早い。『太上老君中經』の撰述時期如何によっては、それに基づいて「洞神經」が撰述された可能性もある。? -26 に基づいてその内容を確認しおくならば、「真人」は「上皇の治」を補助し、「中仙」は雲に乗り海を越える能力を備え、「下仙」は「尸解」を経た後に「神使」になると

説明し、しかし、「道非有所異、但有尊卑等故耳」と、「道」そのものはより包括的であり、それを修得する人の器量に応じて異なった在り方で具現化するとする。この考え方は、? -14、? -15等と通じるものである。従って、修道の年数(=年齢)に応じて変化が生じ、「千歳」になれば「仙真人」となり、「萬八千歳」を過ぎると「童子」に戻ることになるのである。

以上の巻次未詳「洞神經」は、総じて言えば、「洞神經」の経文そのものが引用されるのは宋代を下限とし、それ以後のものは先行文献の孫引きとなる。即ち、宋代を下れば、最早「洞神經」は「洞神經」としては存続し得なくなつたと考えられる。

(二)、付品題・経題「洞神經」

次に、「洞神經」に何らかの品題、経題が付されているものを見ていく。これらを巻次未詳「洞神經」佚文の次に配したのは、品題、経題が付されていることから、「洞神經」ではあるものの、その一部が何らかの形で独立流通していた可能性、或いは、特定の目的のために「洞神經」を基礎に撰述された可能性等が有ると考えられるからである。

●「洞神三皇經」

・? -27、? -28

? -27は六朝の撰述と目されている『道要靈祇神鬼品經』が引く「洞神三皇經」であり、? -28は『無上秘要』が引く「洞神三皇經」である。「洞神三皇經」の名称に就いては、第一論文で指摘した様に、「洞神經第六」と称される経文と同一内容が「洞神三皇經」と称されていた。この情況が「第六」に限定されたものなのか、「洞神經」全体に該当することなのかは判然としないが、「洞神三皇經」という名称自体が、「洞神經」と「三皇經」とを一連のものとする認識が有つたことを示していよう。

? -27は「神」に就いて述べたものである。「神」に就いての説明がされている点は、一つには、「洞神經」という經典名に就いての説明である可能性がある。とするならば、巻次としては比較的早い巻次に属すると考えられる。もう一つは、「第十三」が「精・神・炁」に就いて論じていたことから、その箇所「神」に就いてなされた説明であるということも考えられる。一方、「洞神經」は体内神に就いても言及していたが、? -27の「神」は体内神とは直接に関わるものではなかろう。一方の? -28は修道者の法服に就いて述べたものである。

● 「洞神經釋守三一」**・ ? -29**

? -29 は「洞神經釋守三一」と題されたものである。「守三一」という表現は「洞神經」では他に例を見ないものの、第一論文で検討した様に、「洞神經第十三」は「洞神經三環訣」と題され、その内容は「三」に関するものであった。? -29 は「第十三」と関連するものかもしれない。

? -29 の内容は一種の「三乗」観を示すものである。「知守虚無空者爲大乘也。守神鍊形爲中乘。守氣含和爲小乘也」という内容からすると、「鍊形」「守氣」等の言わば「術」は「知守虚無」よりもレベルは低く評価されていることが分かる。こうした「術」よりも「無欲」「無」などを高く位置付ける発想が「洞神經」自身にも見られることは、「第十一」で確認した点である。? -29 の僅かな記述からは判然としないが、「洞神經」には自身を「大乘」と位置付ける発想も有ったのではないだろうか。

● 「洞神太上三一經」**・ ? -30**

? -30 は「洞神太上三一經」を典拠とするが、『洞神八帝妙經』(2b/7) に「三皇三一經」と題されて同文が見られる。「三皇三一經」と称されていたものが「洞神太上三一經」と改称されたと推測される¹⁵。

? -30 は、先ず「第三、洞神三一」とし、続けて「出洞神太上三一經」と注釈している。つまり、「三一」というより大きな括りの中に「洞神經」タイプの「三一」が有ると認識されており、それを専論しているのが「洞神太上三一經」であるという理解である。『道藏闕經目録』に『洞神三皇三一經』と有ることからしても、恐らくは「洞神經」から分離独立した文献であろう。

● 「洞神誠身保命篇」**・ ? -31**

? -31 「洞神誠身保命篇」は、その全文が『洞神八帝元變經』「誠身保命第十四」(31b/10) と一致する。『雲笈七籤』所引は『洞神八帝元變經』に基づくものであろう。これらが「洞神誠身保命篇」と題されているのは、恐らくこの一段が「聖人保命之最」という語で始まるからである。第一論文で指摘した様に、『洞神八帝元變經』は「洞神經」より後出と考えられる。

? -31 は、「保命」のために最も重要なのは「身心」であるが、中でも、外界

と関わりを持ち、「善悪」を生み出してしまう「心」が最も重要であり、従って、修道者は「心」の律し方に最も留意しなければならないと述べている。第一論文で指摘した様に、「洞神經第七」は「心」が如何に制御し難いものであるか、ということ述べていたものであり、同じく「心」を重視しているという点で、?-31と通じる。?-31は「第七」である可能性を考える必要が有るであろう。但し、『洞神八帝元變經』の末尾部分では?-31には見られない。その部分では、儒教(=「禮儀」、道教(=「仙道」)の「二教」に依り「成俗」と「出塵」は達成されるものの、「還無」の達成には「秘術」による「召役鬼神」が必要であるとされている。「術」の方を高く評価するこうした記述は、前半で述べられている「心」を重視する立場と若干の齟齬を来たしている。その意味で、『雲笈七籤』が引用する部分までの方が一貫性が有る。

● 「洞神大有經」「洞神小有經」

・ ? -32、 ? -33

? -32、 ? -33は何れも南宋・謝守灝『混元聖紀』が引く「洞神大有經」「洞神小有經」である¹⁶。本来は「三皇文」に冠せられていたはずの「大有」「小有」の区別が、ここでは「洞神經」に付されている。但し、現在確認し得た限りでは、?-32、 ? -33にしか見られず、「大有」「小有」の語を「洞神經」に付することが一般的であったとは考えられない。

これらの資料は「三皇」の統治年間、即ち「三皇」そのものに就いて述べている。注意すべきは、?-33の注釈に依れば、統治年限の数え方が「大有洞神經」と「小有洞神經」とでは異なっていたとされている点である。即ち、少なくとも注釈者は「大有洞神經」と「小有洞神經」とそれぞれ題された異なるテキストを目にしていたことになる。謝守灝の場合に限って見られることから、仮に彼が「三皇經」を「洞神經」に置き換えたのだとすれば、南宋の時点で依然として「大有三皇經」「小有三皇經」の別が存続していたことになる。

● 「洞神(玄)訣」

・ ? -34 ~ ? -38

? -34以下は「洞神(玄)訣」と題されるものであり、両者は同一文献と推測される。明『道藏闕經目錄』巻上に「太上洞神訣[四卷]」と有るが、或いは「洞神(玄)訣」は「洞神經」の一部が独立したものと推測される。?-34、 ? -35は『黃庭内景經』の梁丘子注が引くものであり、梁丘子注が引くものは?-6~?-11「洞神經」にも見られ、これらは全て体内神に関する内容である事から、相

互に関連するものと考えることが出来る。? -6 ~ ? -11 が「洞神經」として引かれ、? -34、? -35 が「洞神玄訣」として引かれている点は、仮にこれらが全て同一巻次から引かれているとするならば、「洞神經」経文中に「玄訣」と称される段が有り、その双方から梁丘子が引用したか、? -6 ~ ? -11 と同一巻次の「洞神經」の一部分が「洞神（玄）訣」として独立し流通し、その双方から梁丘子が引用したことが考えられる。

「洞神（玄）訣」は何れも「三尸」「三蟲」に関するものである。又、梁丘子の注に基づくものではないが、北宋以前の成立と目されている? -36、? -37『太清中黄眞經』も同様に「三蟲」に関する記述を「洞神經玄訣」として引用している。特に? -36 は? -34、? -35 を合わせた内容となっている。恐らくは、? -36 が本来の形と思われる。

又、? -38 は「洞神（玄）訣」とは明記されていないものの、関連する内容であることと、同じく『太清中黄眞經』が引用していることから、「洞神（玄）訣」である可能性が極めて高い。暫時ここに配置しておく。

以上の検討を踏まえ、「洞神經」全体の構成を整理しておきたい。但し、現時点では巻次を特定出来ない資料も多く、暫定的なものに留まる。

巻次	巻次明示佚文内容	巻次不明佚文	付「品題」「経題」佚文
洞神經巻第一	未詳		
洞神經巻第二	未詳		
洞神經巻第三	「皇文帝書」の存在と、三皇への伝授	?-4 (「三皇」)	
洞神經巻第四	未詳		
洞神經巻第五	未詳		
洞神經巻第六	・「三代三皇君」と体内神として「三皇君」の存思 ・「三皇文」を構成する文字 ・「三皇」が「氣・神・生」を統治すること ・「洞神三皇經」	・?-21 ~ ?-25 (「三代三皇」) ・?-1、?-7 ~ ?-11、?-19 (体内神) ・?-2、?-3 (「三皇文」) ・?-4 (「三皇」) ・ ? -27 (「洞神三皇經」)	・ ? -32、? -33 (「三皇の統治」) ・ ? -30 (「三一」) ・ ? -34 ~ ? -38 (体内神)
洞神經巻第七	「心」の修養	?-5 (「心」)	? -31 (「心」)
洞神經巻第八	・国土の描写	?-20 (天界)	
洞神經巻第九	・未詳		

洞神經卷第十	・未詳		
洞神經卷第十一	・「道」と「術」	?-14 ~ ?-17、?-26 (「道」)	
洞神經卷第十二	・「陰陽歌」、各種戒律、齋 ・薬物の処方と「蟲」	・ ? -4 (戒)	・ ? -28 (法服)
洞神經卷第十三	・「三一」 ・洞神經三環訣		・ ? -27 (「神」) ・ ? -29 (洞神經釋守三一) ・ ? -29 (「三乘」)
洞神經卷第十四	・投簡、齋儀		
?	?	? -18 (「師」)	

道教文献は巻次・品題等を示さずに文献を引用する 경우가多く、『無上秘要』がその代表である。だが、一部の道教文献は努めて巻次・品題を付そうとしている。『上清道類事相』、『道教義樞』がその例である。しかし、これ等が引用する「洞神經」には、巻次が明示されていないものも一部含まれている。この事は、『上清道類事相』『道教義樞』の編者が目にした「洞神經」の一部には巻次が表示されていなかったのではないかと想像される。それは、既に「洞神經」が全体として纏まった形態を維持していなかったか、或いは、「洞神經」の名の下に随時に撰述が為されていたことを示唆していると思われる。一方、本来巻次等を表示せずに道典を引用する文献が、何らかの経題・品題を付した形で「洞神經」を引用しているという場合は、その「洞神經」が経題・品題を付した形で独立流行していた可能性を示すと言えよう。

結語

既に指摘した様に、「洞神經」の経文を直接引用する一次資料は宋代を下限とする。それ以降の資料に見られるものは二次的引用であるか、或いは、「洞神」という独り歩きた観念に基づいたものと考えられる。後者の顕著な例を最後に若干見ておきたい。

南宋の汪契眞『上清靈寶大法』¹⁷は、「至桓帝時、永壽元年、正一太清洞神教下降人間。武帝時名河上公、說道徳篇章」(『上清靈寶大法』1/4b/5)、「且洞神部、盛於東漢、自盟威籙以下、諸階雜籙、悉總于正一壇」(同27/5a/8)と、「洞神」の出現を東漢の時とするが、前者は「洞神經」はそもそも「人間」に下るものであるという観念を踏まえ、後者は「正一盟威」と関連付けられている。『上清

靈寶大法』のこうした記述は、元々「老子」「道陵」「正一」等と結び付けられ易い傾向を持っていた「洞神」が、南宋に於ける「正一」の隆盛という情況と呼応して記述されたものと思われる¹⁸。更に、元末『道法會元』には、「如正一盟威已下諸籙、及天心正法之類、則洞神部也」（『道法會元』178/6a/9）、「洞神即盟威都功天心五雷等法籙」（同179/2a/7）等と見られ、何れも「正一」と結び付けられた「洞神」、或いは、種々の「術」が「洞神」の名の下に総括されている状況を見て取ることが出来る。前者では、「正一盟威已下の諸籙」「天心正法の類」が「洞神部」であるとされ、後者では、「洞神」は「雷法」と融合され、「正一」とも結びついている。雷法と正一との関りも指摘されていることであり、そうした状況がここでは反映されていると思われる¹⁹。

もう一つの事例が浄明道との関りである。従来あまり指摘されなかったことだが、浄明道文献には「洞神」の観念がしばしば見られる。例えば、宋代撰述と目される『太上浄明院補奏職局太玄都省須知』の「洞神職制律格」は、「洞神」の教えが「元始天尊」に始まり「太上老君」によって「人世」に伝えられたものであると述べ（14a/2）、又、同様に近世浄明道文献と目される『太上靈寶浄明飛仙度人經法』も²⁰、「洞神經」が人間世界に下されるものであるという観念に基づき、「文郎・武郎」の職を述べている（1/23a/10）。更に、宋の『太上靈寶浄明洞神上品經』は経題自体に「洞神」の語を含み²¹、更にその「召神品篇第二十」では「役使鬼神、去病除禍」等の「術」を重視し（下/2b/1）、そして、「此所謂三五飛歩洞神役使鬼神之要術也」（下/3a/3）と総括している²²。又、『太上靈寶浄明法印式』の「太上靈寶浄明法序」は「上清上帝」が「扶桑洞神堂」に下り「浄明法」を説いたと述べ（1a/2）、又、南宋『靈寶浄明新修九老神印伏魔秘法』「序」は、「靈寶浄明秘法」が出だされた時、「洞神仙卿」を「訓導學者師」としたと述べ（/1b/4）、又、乾隆本『逍遙山萬壽宮志』所収陳宗裕撰「勅建烏石觀碑記」には、唐の張開先が許上期から伝授された方術が「皇經」であり²³、それは「鬼神を効召するの秘法」であったとされている²⁴。これらを見ると、近世浄明道の文献では「洞神」の観念が如何に重要なものとして位置付けられていたかが分かる。但し、既に検討した「洞神經」に見られる具体的内容が吸収されている訳では決してなく、あくまでも、通念としての「洞神」に基づいたものと考えられる。何故、近世浄明道が「洞神」の観念をこれ程までに重視したのかは審らかにし得ないが、或いは近世浄明道の性格が既に総括されている様な、「術」としての性格を色濃く含んでいる点と或いは関連するのかもしれない²⁵。更には、特に宋代以降、「洞神經」と「正一」との結び付きが強調されていた点と、浄明道自体が「正一」と関わるとされている点との間に、両者を

結び付ける原因が有ったとも考えられよう。

「三皇内文、召天地神祇之法」とは、『抱朴子内篇』『金丹』に夙に見られる表現であり、これが「召制鬼神」「符禁章醮之類」という、後世の「洞神經」の性格を示す表現の基盤となった訳だが、六朝～宋に於いて受け入れられていた「洞神經」の実態は、それよりは遥かに豊かな内容を備えるものであった。しかし、宋代を下限に「洞神經」自体が纏まった形で存続しなくなった後、「召制鬼神」という「洞神經」の通念は再び独り歩きし、その枠組みで「洞神」という概念が取り込まれていくことになったのではないだろうか。

(注)

- 1 「洞神經」に関する先行研究、「洞神經」全体の検討に就いては、拙稿「六朝以来諸文献所引「洞神經」に就いて—①卷次明示「洞神經」—」(『熊本県立大学文学部紀要』第14巻所収。2008年。以下「第一論文」と略す)を参照されたい。尚、紙幅の関係で本論では十分な資料を紹介出来ない。詳細は科研費報告書を参照されたい。
- 2 大淵忍爾『道教とその經典』(創文社、1997年、p.257)。
- 3 「大有籙圖經目」に就いては第一論文を参照されたい。
- 4 これら近世の文献が載せる「三皇文」に就いては科研費報告書で少し立ち入った考察を試みている。参照されたい。
- 5 前掲大淵氏著 p.291. 注 (25)。
- 6 劉仲宇「『三皇文』新探」(『中国道教』1993年第2期、1993年)。
- 7 第一論文参照。
- 8 第一論文参照。
- 9 任繼愈『中国道教史(増訂本)』(中国社会科学出版社、2001年、p.386)。
- 10 「洞神經」の「五戒・八戒」等に就いては楠山春樹「道教戒の概観と五戒・八戒」(『道家思想と道教』所収。平河出版社、1992年)を参照。
- 11 梁丘子注に就いては、垣内智之「梁丘子の『黄庭經』解釋をめぐって」(吉川忠夫編『唐時代の宗教』所収。朋友書店、2000年)を参照。
- 12 尚、「洞神經」に「天老」の名が見られることは後述する通りだが、この「天老」と「三台」とが関連付けられていることに就いては、朱越利「天老考」(四川大學『宗教学研究』1986年第二期所収。1986年)、Franciscus Verellen, The Heavenly Master Liturgical Agenda According to Chisong Zi's Petition Almanac (*Cahiers d' Extrême-Asie* 14 (2004))等を参照。
- 13 朱越利「天老考」参照。
- 14 本論に於ける各道典の撰述時期に就いては、主として任繼愈主編、鐘肇鵬副主編『道藏提要(修訂本)』(中国社会科学出版社、1991年)、朱越利『道藏分類解題』(華夏出版社、1996年)、『中華道藏』「解題」、道藏通考 *The Taoist Canon : A Historical Companion to*

the Daozang, (edited by Kristofer Schipper & Franciscus Verellen, The University of Chicago Press, Chicago, 2004) 等の記述を参照した。紙幅の関係で一々の注記は省略した。

15 『洞神八帝妙經』が引く「三皇三一經」に就いては、加藤千恵『『老子中經』と内丹思想の源流』（『東方宗教』第87号、1996年）が言及している。

16 『混元聖紀』に就いては、楠山春樹『老子傳説の研究』（創文社、1979年）を参照。

17 『上清靈寶大法』の撰述時期に就いては、松本浩一『『上清靈寶大法』の文献学的研究：靈宝派の修行法をめぐって』（『図書館情報大学研究報告』第17巻第2号、1998年）を参照。

18 「老子」「道陵」と「洞神經」とを結び付ける例は、夙に唐の『甄正論』に見られる（T 52, 561a）。又、南宋に於いて「洞神」と「正一」とが一体となっていた事に就いては、丸山宏『道教儀禮文書の歴史的研究』（汲古書院、平成16年、p.141.）を参照。又、南宋に於ける「正一」の隆盛に就いては、松本浩一『宋代の道教と民間信仰』「第四章第二節 張天師と南宋の道教」（汲古書院、平成18年）を参照。

19 李遠國『神霄雷法』（四川人民出版社、2003年、p.50.）を参照。

20 秋月観暎『中國近世道教の形成—浄明道の基礎的研究—』（創文社、1978年）及び同氏『浄明道研究上の二、三の問題（二）—『太上靈寶浄明飛仙度人經法』をめぐって—』（金谷治編『中國における人間性の探求』所収。創文社、昭和58年）を参照。

21 前掲秋月氏著を参照（p.125.）。

22 浄明道の「正一斬邪」「三五飛歩」等の「術」に就いては、畑忍『『浄明忠孝全書』成書考—劉玉に降授された法をめぐって—』（『人文論叢』（大阪市立大学大学院文学研究科）第28巻、2000年）を参照。

23 秋月氏前掲著はこの「皇經」を「三皇經」であるとする（p.105.）。

24 『中國道觀志叢刊』第31巻所収（江蘇古籍出版社、2000年）。以上の近世浄明道文献に就いては、秋月氏前掲著の考察に依る。

25 卿希泰主編『中國道教史 第三卷（修訂本）』（四川人民出版社、1996年。p.357.）

本論は、平成18～20年度科学研究費補助金「洞神經の基礎的研究」（基盤研究C）による成果の一部である。

(一)、卷次未詳「洞神經」

? -1 頭髮神、字尋之。兩目神、字英明。頂上神、字東王父。顙戶神、字泥丸君。眉間神、字元光。兩耳神、字嬌女。人中神、字太一。鼻孔神、字通廬。口中神、字丹珠。兩手神、字魂陰。上元神、字威成。中元神、字黃子。下元神、字命光子。肩背神、字朱雀。兩脾神、字隱。陰神、字窮史、女子、字丹成。兩膝神、字樞公。兩脛神、字隨孔子。兩足神、字戴天柱。

右一十九神、兆姓爲姓名、名即字、字即名也。

肝老子君。肺太和君。心大尉公。脾子丹母。腎司徒司空司命司錄司隸廷尉。膽太上道君。胃諫議大夫。臍太一。大小腸元梁使者、玄谷大將軍。三焦、左社右稷、風伯雨師、雷公霹靂。

右一十條、領一萬八千神。人存之則一萬八千神不散。不散者天降一萬八千神、附身中、合三萬六千、俱舉一身、上昇三天、則成神仙、變化無窮矣。人法地則天外形、而神住則形成、神去則形壞。

凡人不知存神、動止任意、意愚事僻、神散形枯。仙真聖人、守神无替、常存自在、名在左契。志學之士、當知、人身之中、自有三萬六千神、左三魂、右七魄、陰陽配合、共輔護識神五行王相之君、周衛體內。一千二百形影、一萬二千精光、備守體外、日日存之、時時相續、念念不忘、長生不死。不能長存、八節勿替、能念身神、康強无病。病三呼之、常衛子身。欲臥之時、左手撫心、右手撫臍、各二七、陰咒曰、

欲具身神、從頭起、經歷四肢、至踝子。

呪竟、存之、委悉乃眠、必得吉夢、髣髴見神。若有罪過、應致灾厄、神來語人、或示形象、倚託物類、使人思惟、自解意趣、吉凶善惡、了然知之。避禍就福、所向諧也。

三魂。第一胎光、第二爽靈、第三幽精。七魄。第一尸狗、第二伏矢、第三雀陰、第四吞賊、第五蜚毒、第六除穢、第七鼻肺。右出洞神經。(『無上祕要』5/12b/7)

? -2 三皇要用品。

天皇文曰、所以爲乾淳陽之精、日月垂光、二十八星。有知此文、與吾共并。第一之要、先求長生。第二之要、當求藏形。第三之要、當避世榮。解此三要道、乃成長生、以得游於華嶽。藏身以訖、天食其祿、棄榮去祿、天致金玉。若欲去求入深山者、當語乾皇內經、必當相成。

黃帝曰、地皇文者、乃生萬物、無所不育。家有此文、富貴之首。求仙行約、此是其母。千變萬化、皆地所受。包含穢匿、能爲土主。

黃帝曰、人皇文者、皆知死生之錄、識百鬼之名、記萬神姓名。三皇天文大字。

黃帝得神圖天文字、以知九天名、山川靈之字。若能按文致諸神者、可以長生、可令召司命、削死籍。必爲人除之、然後修道求術、必得神仙矣。若欲求昇仙、皆當絕陰陽、乃可求見玉女。不能求昇仙、不能絕陰陽者、但可召致素女、以自匡輔徊旋。當髣髴有人形像、當聞琴樂之音、卽爲是也。自是之後、必享延壽三百餘年。此地錄天文、不可妄傳也。若欲傳授子孫、先當伏思七日、令身无咎、乃可傳之家。欲昇仙、當求此文。能修此文、萬術之眞、生於皇道、克定乾坤。九天以下、五嶽四瀆神、皆可問吉凶富貧。齋而行之、劇事嚴君、不得傲慢、自害其身。若有妄召、罪及先人。天文曰、諸欲致九天九地、五嶽四瀆、三河四海、太一北君、日月諸神、五帝、父母夫人、諸女、錄吏刺姦、諸禁官、皆當如此法召之。若有疾病時、毒疫流行、有官急之事、皆可爲之。

第一、三十字、是九天印文、不可妄觸訶也。可召九天校事、刺姦吏。若病者乃可召之耳。第二、一十二字、召都官司命。第三、二十字、召九天父母夫人女。第四、一十字、召五帝父母夫人女。第五、一十字、召太一父母夫人女。第六、一十字、召北君父母夫人女。第七、五字、召五嶽父母夫人女。第八、一十字、召四瀆父母夫人女。第九、五字、召三河父母夫人女。第十、九字、召三公父母夫人女。凡有急、召天地諸神父母夫人女、以爲致任、則終身无患。第十一、四字、召西王母。第十二、五字、召東王父。第十三、七字、召老子、一名老彭。第十四、十五字、召日月將軍、父母夫人女。第十五、一十字、召河侯君、以問水事。第十六、九字、是九天之名也。

天皇文第一法。

第一、一十八字、召天帝、以救急難。書著緋絳上、圓一尺、著好地。西向叉手、屏炁五十息、天帝必來見、勿得畏恐、忽忽徐徐。設有急所患、請救必得脫矣。第二、一十八字、召天神、以救刑獄罪法、應見備罪、如上法請救、必吉。第三、一十九字、召高上。若家有大病、若犯天神、不能自知病者、如知四肢重炁之者、當召高上請救、北向如上法、吉。第四、一十七字、召太一君。若家欲求高遷官爵、所求連年不得、當召太一求遷。白黑書著皂上、圓二尺、北向如上法。太一必付司祿平與官爵位矣。第五、一十八字、召北君。身恐有水厄、若水病者、如太一法。北君必來勅語意如言、必无患也。若但書此北君字著衣中、行舟萬里、風波不起、船不沈。便可試驗。第六、一十字、召司命。若家有急命盡病困、可以書著紙上。東南向著地、訖、以五綵廣五分長二尺、著紙前、須臾司命必來、語其意者、必吉矣。第七、一十四字、召司祿。若欲求昇仙致行廚者、書青上、圓二尺、東北向、如天帝法、司祿將來。求天祿行廚、避世昇仙、潔齋而百日、必致行廚、得昇仙。諸不得爵祿者、求之必得矣。第八、二十字、召司危。若家不和、爭鬪相疑、不相信、內外不同者、書此文著紙上、以和日書之、合日召之、司危必來和合、家無所患、國無所

苦、如一人必吉矣。第九、三字、召天丞相。書繪上、圓九寸、著好地。若犯天文、若求願不從、亦當作此法、召丞相、求所願必得矣。第十、一十三字、召六丁。若家有邪病厭夢、忤過鬼刺、心腹絞痛、蜚尸入藏、此法著紙上、召六丁問意、六丁叩頭、將爲人治之、收諸亭長、自相勝吉矣。第十一、十二字、召日月將軍。若家有耳目卒聾盲者、便書此字、著日中、夜著月中、无日月不爲。日月將軍來問意、必爲人治之愈也。第十二、一十一字、召飛廉。若家有小口卒病、若久病者、書此法著紙上、西向召問意、必愈。第十三、七字、召日游。若家有乳婦過疾、書此法著紙上、問意即愈矣。第十四、一十二字、召御史。若欲遠行避惡、道路不通、書此法召御史問意、道路即通。餘字召將軍月殺。若家居宅舍葬埋犯將軍月殺者、書此法召之問意、即吉无患也。

地皇文第二法。

第一、一十一字、召土公。若家有病黃疸身體腫、若欲動土者、書此法著黃布上、圓二尺、以墨書之。須臾來語意、吉矣。第二、一十八字、召社公。若家有犯社者、若他家有社者、若欲移社樹、若伐社、書此法著紙上、西向、須臾社公來勅之、即吉。第三、五字、召司陰。若家有陰匿病者、若他陰謀欲圖己者、書此法著紙上、召司陰問意、即吉矣。第四、二十字、召阡陌亭長游激。有忤道中卒得病者、書此法著道中、亭長游激來問意、即吉矣。第五、九字、召問門丞戶尉百邪之長。書紙北向、須臾門丞戶尉即來勅之、及以百邪、汝護我家、必吉矣。第六、二十八字、可召百鳥。第七、一十三字、可召蛇虺蟲鼠、各有名在天文中。第八、四字、召西嶽。第九、一十字、召北嶽。第十、一十一字、召南嶽。第十一、一十二字、召中嶽。第十二、六字、召東嶽。第十三、五字、召四瀆。第十四、一十二字、召三河。餘字召百獸麒麟之所主、所在皆至。要在天文中。凡欲知古尸喪處所、當問阡陌亭長、即可知處所也。

人皇文第三法。

第一、一十二字、召百鬼制六丁。第二、一十二字、召司命司錄太一天一。第三、一十二字、召地中百精、金銀銅鐵璧玉寶物、問皆知所在。欲取者取、不取復止。第四、一十二字、召家中魂魄鬼、諸要八獄吏、皆可致之。第五、六十二字、召九天錄吏。令削死籍、除死錄。餘字注在天文中。

三皇內音。

朱官青胎之符。

是九天父母所受於西王母、大月旦吞赤書者、小月旦吞黑書者、皆宿昔燔香行禮、然後服之。既令人不飢、又益精補腦、使人身輕美色、延年无窮。道士不見此文、服炁行道、徒自苦耳。

九天發兵內符。

出人皇第七·十字始。此符可以服虎狼豹獸、道士入山不帶此符、惡獸不畏人而或犯人。

金光自來內音符。

出天皇第六·十五字始。道炁星精之首目矣、皆是五星之炁、金玉之精。炁入人身、精入人、骨如金玉、身如星辰。道士服食、不吞此符。終不得仙矣。

天水飛騰內符。

出大字第九·十三字中。天有常數、三千歲大水一出。諸道士有仙籍者无此符、不得過。若大水帶此符、著頭上、可入靈山、江河神山精爲人開道、必過凶難矣。一歲輒一服。服用壬子日、墨書之、令人不飢。方一尺紙上、水服之。令書大水日子在其中、過此水則除去。

神仙昇天大券文。

出人皇中第六·十八字。此券與印同受、不受三天大券。有所封水三官及山川土地神靈不畏人。忽行有所封、亦反受其殃。千二百章、无券不行。所有券、不受亦不行。

三皇內書秘文。

仙人之要、第一者以劾召萬神、萬神從之焉。欲召法、丹書白素、齋戒百日、不交同類、於山林之中獨處、夜召之也。以文向北、布著地、道士佩九天發兵符、須與一食頃、萬神至。若鬼物皆從背後來、若神皆前來、其時意中亦自有所解。

三皇傳文。

道士无此傳文、不得見仙人。

五嶽陰符。

一名色天生胎經、人有五嶽圖、无此陰符、則五嶽不遣五神衛子矣。

太上長存符。

出太上經天文中篇。八節日齋、平旦丹書服之。服之三年、太上丈人除削死籍、拔度長存籙中。道士无此符、徒學道則故不免死。

大字下篇符。

道士暮欲求萬福、應見仙人、或欲知吉凶、丹書方三寸、吞之、靜思而臥、便知明日吉凶事。高上名召高上太和、食頃、立形見至。天皇上名召司命、青書一尺、清齋七日、著庭、食頃、司命形見、可問吉凶。高天名可召司錄。太上名可召司陰、帶此符、辟兵。皇天名可召司危、赤書青著、盛屋中、司危立至、可問吉凶。蒼天名可召山神、書素五寸、以丹著室中。高皇名可召河伯、著水中、河伯立至、可問水事。上帝名可召天丞相、丹書黃著室中、立至、可問立身可否。天帝名可召九天父母、丹書、問我後世及求願。帶此、无疾傷。右出洞神經。〔無上秘要〕25/1a/2)

? -3 黄帝曰、大洞玉清之文、皆皇上高眞所修、不傳地上之士。洞玄上清之經、時當下教、以授至學之士。洞神三皇之書、傳訓下世、鎮化佐國、扶濟兆民。右出洞神經。(『無上秘要』32/1a/3)

? -4 洞神戒品。

洞神三界戒。

帝栗陸氏說受經戒日、宜各努力、急共勤行、故重丁寧諦受之。

第一戒者、諦識因緣、勿忘本逐末。第二戒者、諦守少私、勿利我損物。第三戒者、諦習勤行、勿混任失真。

右三上戒、上皇所重、上帝所奉、上土所修。修行奉持、全而不破、三氣正神、降輿爲一、身神又一、二無二焉、得道常存、號曰太上。不行此戒、服佩符文、勞而無驗、非太上弟子^①。

洞神五戒。

黄帝曰、人不持戒、吏兵不附其身、所得無驗、徒勞用心。若不信至道承事師、若欲使吏兵防身護命、却死來生、禳疾延壽、爲人消災、救治厄患、存思求微、剋期取驗者、受五戒。

第一戒者、目不貪五色、誓正教、學長生。第二戒者、耳不貪五音、願聞善、從無惑。第三戒者、鼻不貪五氣、用法香、遣臭穢。第四戒者、口不貪五味、習胎息、絕惡言。第五戒者、身不貪五綵、履勞動、以順道。是爲五戒、五老帝君各遣一十五神、防護受持者身^②。

洞神八戒。

黄帝曰、余嘗閑居、太上垂降、見問經戒大小始終。余雖受持、多所不了、未測次序、具啓太上。太上答曰、凡諸戒律、通應共行、其間緩急、繁簡高卑、各有意義。准擬玄源、變化生數、皆漸相成。三五八九、十百千萬、雖隨緣所堪、亦不可越略。知因向正法、修長生不死、三五兼參、宜受八戒。

第一、學解五備五德。第二、勤習五事、不可無恆。第三、平理八正、行藏順時。第四、明識五紀、與氣同存。第五、精審皇極、上下相和。第六、修行三意、期會三清。第七、決定疑惑、化僞入眞。第八、考校徵驗、消禍降福、鍊凡登聖、無負三尊^③。此爲八戒。

凡人有心學求度世、先能持戒、解而不滯。戒無多少皆屬太无。太无太空、是戒根本。守本究末、外惡自消、內患不生。又先修齋、乃精能通神、命召速效。久積塵垢、蕩之須防、不可闢排頓盪。雖建此心、塵終不去、魔來惱之、更增災咎。防治此弊、以戒爲漸。能持多少隨才所堪、犯則首悔、改革自新、合則又進、得道有期。右出洞神經。(『無上秘要』46/14a/7)

? -5 洞神經云、心齋坐忘、至極道矣。(『道教義樞』2/20b/8)

? -6 洞神經云、天有九星、兩星隱、故稱九天。地有九宮、故稱九地。人有九竅、故稱九生。言人所由而生也。(梁丘子『黃庭內景玉經註』中/24a/9)

? -7 按洞神經云、六府者、謂肺爲玉堂宮尚書府。心爲絳宮元陽府。肝爲清冷宮蘭臺府。膽爲紫微宮無極府。腎爲幽昌宮太和府。脾爲中黃宮太素府。異於常六府也。
(梁丘子『黃庭內景玉經註』中/24b/7)

? -8 洞神經曰、面爲尺宅。字或作赤澤。(梁丘子『黃庭內景玉經註』上/10b/9)

? -9 洞神經云、腦爲泥丸宮。(梁丘子『黃庭內景玉經註』中/15a/8)

? -10 洞神經云、頭爲三台君、又爲崑崙、指上丹田也。(梁丘子『黃庭內景玉經註』中/14a/9)

? -11 (洞神經)又云、臍爲太一君、亦爲崑崙、指下丹田也。言心存三田、諸神皓然在目前。(梁丘子『黃庭內景玉經註』中/14a/10)

? -12 洞神經云、天老百善者、人有十善、必生福子。人有二十善、神明護己。人有三十善、辟除惡鬼。人有四十善、應死不死。人有五十善者、終身無罪。人有六十善、道君自存。人有七十善、得與五嶽相連。人有八十善、得脫死名。人有九十善、必爲神仙。人有百善、必昇九天。(『要修科儀戒律鈔』12/11b/6)

? -13 洞神經云、觀覽元化人、累劫曾息樓。千年臥復起、畢竟無終休。(『上清道類事相』2/2b/4)

? -14 洞神經云、大道降神、應接一切、或有名無字、有字無姓、或有位號、姓名亦無。各由感致、參差不同。是謂正神皆道應化。(『妙門由起序并序』4a/10)

? -15 徐法師舉洞神經云、神人、真人、仙人、道人、聖人、賢人、合共爲道。(『道教義樞』1/13a/8)

? -16 洞神經云、大道妙有、能有能無。道體本玄、號曰太易。元氣始萌、號曰太初、一曰太虛。其精青、其形未有。炁形之端、號曰太始、一曰太無。其炁黃、其形未有。形變有質、號曰太素、一曰太空。其炁白。其形亦未有。形質已具、號曰太極、一曰太有、一曰太神、一曰太炁、又曰太玄、又曰太上、又曰太一。其形赤黃、質定白素。白黃未離、名之爲混也。(『道教義樞』7/4a/7)

? -17 故洞神經云、妙象無形、應感有體。眞精之炁、化成姿容。

(『元始無量度人上品妙經四注』所收李少微注1/4a/2)

? -18 洞神經云、明智聖師、顯文以赴機、用用以應感。感以文通、通則成聖也。

(『道教義樞』10/3a/5)

? -19 洞神經曰、太一名務猷收、字歸會昌、主諸天地、其神最尊。形黑上而赤下、頭戴通天之冠、縱目視也。久久存之、長生不死。(『元始無量度人上品妙經四注』所収李少微注 3/20b/9)

? -20 又(洞神經)云、三界二十八天之上、次四民天。從四民天到太清境、從太清境到上清境、從上清境到玉清境、從玉清境方至無上大羅、乃登極果。應化宮臺、難以言說。謂爲道中之道、又是天尊之位、處七映之宮、居九華之殿。坐金床而悅性、凭玉机以恬神。玉女軒羅、仙童侍衛、分判善惡、決斷死生。(『辯正論』T 52、498b)

? -21 洞神經云、有三三皇、故曰九皇。是初三皇虛無空同之變化、次三皇是玄元始之應變、後三皇是三元之變。以爲三台化形接物。此九皇者並是大道妙用、應化相生。及五帝行化、其次三王、代代習真、莫不法道。(『辯正論』T 52、498b)

? -22 按洞神經、天皇氏以獲爲名、以望爲姓、字子潤。地皇姓鑑、名嶽、字子元。人皇姓愷、名胡洸、字文生。(『古微書』卷三十五)

? -23 主治荒極、雲章載持、逮天協德、與地侔贊 [洞神經云、中地皇君、主治八荒四極、四海山川谿谷] (『路史』卷二「前紀・中三皇紀・地皇氏」)

? -24 繼之以天皇氏、地皇氏、人皇氏。在洞神部。又有所謂初三皇君、而以此爲中三皇。… [諸書說三皇不同。洞神既有初三皇君、中三皇君、而以伏羲、女媧、神農爲後三皇君]。(『路史』卷一「前紀二 初三皇紀」)

? -25 炎帝 [洞神部云、姓伊耆、名軌、一曰石年。在位百四十五載] (『皇朝文紀』卷一「神農氏」)

? -26 第五十四神仙。

子欲知真人仙人何類。仙人衣摺衣、生毛羽。真人無影、衣五彩朱衣。其居無常處、東春、南夏、西秋、北冬、浮游名山崑崙、蓬萊、大郢、九域之上。時上謁上皇、故真人得道、八千萬歲。乘珠玉雲氣之車、駕無極之馬、時乘六飛龍、佐上皇治。中仙之士、中天而上、乘雲往來、歷越海江。下仙之士、法當尸解、晦日朝會拜禮、不得懈怠、當爲神使。道非有所異也、但有尊卑之故耳。故百歲之人、黃頭髮、三百歲之人、兩權起、三百歲之人、萬物耳、四百歲之人、面縱理、五百歲之人、方瞳子、六百歲之人、脅助胼、七百歲之人、骨體填、八百歲之人、腸爲筋、九百歲之人、延耳生、千歲之人、飛上天上、謁上皇太一。爲仙真人、重瞳子、故能徹視八方。食芝服丹、即不老。人萬八千歲、更爲童子、男八女七、從此始。(『太

上老君中經』下 /18b/8)

(二)、付品題・經題「洞神經」

● 「洞神三皇經」

? -27 洞神三皇經云、神明者豫知未萌、名曰神矣。耳目聰明、名曰神矣。

(『道要靈祇神鬼品經』 1b/1)

? -28 洞神三皇經。受道之身、改易世衣者、身之章、號爲法服。人或有衣玄青及白三色爲科、存甲子甲寅甲申之炁、固身形也。玄冠烏巾、青縹單衣、白芒草屣、謂爲法服。得道昇天、文衣自至。凡兼參三洞、通服裙褐、履板冠巾、共得用取靈寶道士法服。(『無上秘要』 43/1a/4)

● 「洞神經釋守三一」

? -29 故洞神經釋守三一云、知守虛無空者爲大乘也。守神鍊形爲中乘。守氣含和爲小乘也。(『雲笈七籤』 49/10a/10)

● 「洞神太上三一經」

? -30 第三、洞神三一。[南極老人、中極道元、北極玄妙。出洞神太上三一經]。

(『雲笈七籤』 49/8b/7)

● 「洞神誠身保命篇」

? -31 洞神誠身保命篇云、黃帝曰、聖人保命之最、莫上於身心。利害身心、豈過於善惡。善惡所起、本於心。心法不住、攀緣是用。所緣者名曰境界、能緣者名之曰心。故萬品所起、莫過於心。萌於心者、名曰行業。行業所操、名曰善惡。故縱欲爲惡、息貪爲善。善者能爲濟俗出塵之益、惡者必作敗德染穢之資。故聖人知無形而用者心也、形不自運者身也。然心不託於身、則不能顯班借用。身不藉於心¹、則亡滅不起。故身心體異而理符、致用萬善而趨一。故能表裏爲用、動靜相持。身無獨往、爲心所使。心法不淨、惟欲攀緣。身量無涯、納行不息。故心爲凡聖之根、身爲苦樂之聚。聖人知患生於心、愆必由己。是以清心除患、潔志消愆。凡俗之流、其即不然。肆情縱欲、不知欲出於心、侮慢矜奢、不知慢生於己。情騁愚暴、不顧其身。故以禍難所階、由之不識。危亡自此、日用不知。故聖達愍愚而垂教也。(『雲笈七籤』 89/8b/3)

● 「洞神大有經」

? -32 洞神大有經云、三皇治各三千六百年。(『混元聖紀』 1/8b/7)

¹ 底本は「民」に作るが、『雲笈七籤』 92/11b/8 所引に基づき「心」に改める。

●「洞神小有經」

? -33 又（洞神）小有經云、五皇治各萬百歲。[詳此二說、大有經止論一代三皇、每一三皇治三千六百年。小有經乃統論三代三皇、每一皇治萬八百歲也。若通論三代九皇、則共經三萬二千四百年矣。或言萬八千者、蓋百字誤爲千耳。今據老子內傳所明、正與大有小有經相符。又、前三皇中三皇各經九千九百億萬歲者、乃計一劫之大數、非止言三皇之身也。所言後三皇者、傳記所載、亦多不同。如洞神經與項峻、止以天皇地皇人皇爲三皇、而三墳書以伏羲爲天皇、神農爲人皇、黃帝爲地皇]。〔『混元聖紀』1/8b/8〕

●「洞神（玄）訣」

? -34 洞神訣云、上蟲白而青、中蟲白而黃、下蟲白而黑。人死三蟲出爲尸鬼、各化爲物、與形爲殃、擊之衝破也。其餘衆蟲、皆隨尸而亡。故學仙者、精謹備於五情之氣、然後服食藥物、以去三蟲。（梁丘子『黃庭內景玉經註』中 /7a/9）

? -35（洞神訣）又云、上尸彭瑀、使人好滋味嗜慾凝滯。中尸彭質、使人貪財寶、好喜怒。下尸彭矯、使人愛衣服、耽姪女色、亦名三毒。（梁丘子『黃庭內景玉經註』中 /7b/3）

? -36 洞神玄訣云、上蟲居上丹田腦心中、是也。其色白而青、名曰彭瑀、使人好味嗜慾癡滯。學道之人、宜禁制之。假令未絕五穀、常行此心持念。一年之外、上尸自終、亦有成矣。人不知玄奧、空絕五穀。若不除貪欲之心者、焉得三尸蟲滅矣。
（『太清中黃真經』上 /7a/2）

? -37 洞神玄訣云、中蟲名彭質、其色白而黃。居中丹田。使人貪財賄、好喜怒、濁亂真訂。令三尸變易、七魂流蕩。（『太清中黃真經』上 /7b/3）

? -38 下尸、其色白而黑。名曰彭矯、居下丹田。使人愛衣裳、耽酒色。學道之人、當心識內安、堅持制之、尸鬼無能爲也、及無敗矣。（『太清中黃真經』上 /8a/3）